泣いてたまるか

泣いてたまるか

TBSテレビ編

庶民のど根性を演ずる渥美清

弘文堂

泣いてたまるか

泣いてたまるか

昭和四一年六月二五日　初版発行

定価三八〇円

編者　TBSテレビ
発行者　渡辺昭男
印刷所　千代田印刷株式会社
製本所　光和製本有限会社

発行所　株式会社　弘文堂

本社　東京都千代田区神田駿河台四ノ四
電話（二五一）七一八六～九
営業所　東京都文京区西古川町一四
電話（二六〇）〇四二〇～一
振替東京五三九〇九

Printed in Japan ©

まえがき

私たちは、あらゆる層に支持され、しかも個性のあるテレビ番組を作りあげるという、たいへん困難な作業を仕事としています。私たちは、今日の不況と物価高のもと、平均化され、画一化されて欲求不満の症状をおこしている世の中で、雑草のように根強く、「泣いてたまるか！」と生き続ける庶民のたくましさを描き、視聴者の願望を満たす番組を作ろうと考えました。

善意をもって精一杯に人生を生き抜く庶民、このイメージにぴたりとした主役として、私たちは渥美清を選びました。この番組には、監督田坂具隆、脚本は昨年のあらゆる映画賞の脚本賞を一人じめにした鈴木尚之、ベテラン野村芳太郎氏をはじめ、林秀彦、橋田寿賀子、桜井康裕、山根優一郎、光畑碩郎、高岡尚平氏たちの協力を得ることができ、「泣いてたまるか」のシリーズはスタートしたのです。

思えば、「昨日の雲は帰ってこない」に始まり、「いまに見ておれ」「悲恋千年」「わが子よ」さらに木下恵介の「二人の星」にいたるテレビ・出版・レコードの三メディアが一体となった一連

のコンビナート作戦は、新鮮な試みとして視聴者および読者に迎えられてきました。

この番組が放映されるや、このたびもまた視聴者の好評を博し、出版への強い希望が寄せられ、ここに本書刊行の運びとなりました。

出版にあたっては、弘文堂田村勝夫編集部長、編集部上原七郎氏、作家の高橋光子氏にお世話になりました。厚くお礼を申し上げます。

一九六六年六月

TBSテレビ企画部兼映画部副部長

岩崎　嘉一

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

目　次

まえがき

第一話　二人になりたいッ……（橋田寿賀子）…一

第二話　やじろべえ夫婦……（桜井康裕）（山根優一郎）…三

第三話　ラッパの善さん……（野村芳太郎）…六

第四話　ビフテキ子守唄……（鈴木尚之）…九

第五話　出世夫婦……（林　秀彦）…二七

第六話　オール・セーフ……（光畑碩郎）（高岡尚平）…二九

装幀・八木沢茂夫

第一話　二人になりたいッ

1

「寒いなァ、寒いなァ」
と、夢うつつにつぶやきながら、小森一平はやたらに掛布団をひっぱっていた。「エッヘン」という咳払いではっきり目が覚めた。カーテンのない窓は、もうすっかり明るくなっている。うそ寒いはずである。彼岸をすぎたとはいえ、タオルケットと薄い夏掛けだけで寝ていたのだ。

そうだ、昨日は母と甥が泊ったのだっけ、と思い出した時、大きなくしゃみが立てつづけに出た。「エヘン、エヘン」と今度は二度きこえた。妻の千代である。一平はわざと鼻をすすりながら、甘えた顔で伸び上ってみた。だが、鼻白んで、すぐ枕に頭をつけた。母のフキ、甥の平太郎と並んだその向う端から、千代はじっと夫を見つめている。
「あなたのお人好しにはあきれるわ。いつだって人に利用されるんだから。風邪なんかひいてもしるもんですか」
と、その目は責めていた。昨夜、床についてからの薄くらがりのなかでも、千代はそんな目をしていたが、まさか一晩中、見つめていたわけでもあるまい。無理もないとは思うものの、一平はいささかうんざりした。
結婚以来、一年半を一平の実家に居候してきた一平と千代は、九回目にやっとクジがあたって、待望の団地へ、昨日引っ越してきたばかりなのである。

実家の四畳半では、夫婦の寝場所がないほどぎっしりつまっていたかに見えた荷物も、夢のように広いアパートに吸収されて、白い壁がいやに目立つ有様である。夢のように広い……たしかに今までと比べての話ではあるが。

「ここ、私たちだけのお家なのね、お舅さんもお姑さんも、お義兄さんもお義姉さんも、あのチビッコギャングの平太郎さんもいないのね」

数え上げていくだけで舌をかみそうになる。

「とうとう二人きりになれたのよ。マイ・スイートホーム」

家を建てたわけでもないのに、たかが団地へ入居できただけなのに、と思うが一平の顔もほころぶ。こんなにもよろこぶ妻の姿がいじらしかった。それほど千代が、大家族の中での新参者として、肩身を狭くして暮してきたということなのだろう。

一平は立ったまま、これだけは真新しい冷蔵庫の陰で、千代を優しく抱き寄せた。外国映画でよくやるように、夫の広い胸に顔を埋めて……というポーズに千代は前々からあこがれていたのだ。なるほど、日頃は少女趣味だと馬鹿にしていたのだが、どうしてなかなか悪いものではない。

一平にだって、頼られたいという男性の本能がある。ところがである——。

「そうだ。私はもう小森さんとこのお嫁さんではなくて、ここの奥さまなんだわ。れっきとした一家の主婦なんだわ。これからはみんなこの私が決めるのね、お米買うのでも、卵買うのでも……」

と、千代のおしゃべりはとめどない。

一平は、早くも総理大臣兼大蔵大臣になったような顔付きの、千代のあごをぐいと持ちあげ唇をふさいだ。千代もたちまち、息をはずませてしがみついて来た。なんだか、原始時代の男が、いぼいぼのついたすりこぎのような棒で、想う女を殴りつけ、髪の毛をつかんで引ずって来たような意気揚々とした気持になった。

ここはおれの天下である。いや、二人の、と妥協してもよい。もう襖を急にあけられる心配もない。昼下りの夫婦愛も悪くない、と二人が以心伝心でおもいはじめた時、ドアが叩かれて、天下泰平の夢は破れた。

新居祝いと称して、父の平蔵、母のフキ、兄の平太、兄嫁の君子、甥の平太郎たちが、どやどやとのりこんできたのである。

それからは、昼下りの夫婦愛どころではなかった。父の平蔵と、その血筋をひいて酒のみの兄平太は、

「たった九回目で、公団アパートのクジがあたるなんて運のいい奴だ」

などといいながら、ぶら下げて来た一升ビンが空になるまで呑みつづけた。

母のフキは「権利金や礼金なんてものの心配もなく、あせらなかったから、福が舞い込んだんですよ」と恩をうることもわすれない。

一番うらやましそうなのは、兄嫁の君子で「長男の嫁なんて、およそ割が悪いわ」と義母の目をぬすんでささやきかける。女どもはしゃべる方もだが、食べる方もあきれるほどの食欲なので口がいそがしい。

甥の平太郎は一口食べては、家中の探険に出かける。中でも水洗トイレが一番気に入ったらしい。出もしないおしっこをやたらにし、盛大に水を流してよろこんでいたが、

「おばあちゃん、ぼく、今晩ここへ泊ってくう」

と、言い出した。水洗トイレのせいとしたら、水洗トイレも罪が深すぎる。

「お引越しで、叔父ちゃん叔母ちゃんもお疲れだから」

兄嫁のせっかくの言葉に、千代の目がパチパチとまたたいて、信号を送ったのに、

「オーケ、太郎ちゃん、引越しったって、そんなに疲れるほど荷物があったわけじゃなし、付添とし

て、おばあちゃんも泊って行きなさいよ」
と一平が口走ってしまったのだ。
新婚旅行から帰って以来、はじめて二人っきりになれたはずの貴重な一夜であった。千代の気持もわかる。わかるけどどうしようもなかったんだ……。
一平は笑顔を作って、もういっぺん伸び上り、顔の前で片手おがみに千代を拝んだ。しかし千代はぷいと横を向き、さっと起き上り、枕許の着換えを抱えて、ダイニングキッチンへ出て行った。全く女って奴はこわい。
しかし、義母や甥の前では愛想がいいのである。
「千代さん、お勤めはやめたし、今度はいよいよ赤ちゃんね、うちみたいに一人っ子じゃ可哀想だから、せいぜい二人はお産みなさいよ」
朝食のとき、新しい家に泊まって、すっかり満足したフキがいった。
「いやあ、ぼくは三人ぐらい欲しいな。な、千代」
と一平も機嫌をとるように言った。
「そうね、でも、やっぱり二人ぐらいが一番適当なんじゃない？」
とこたえたのは千代。そのときはにこにこしていたと思うのだが。
一平が出勤しようと玄関まできた時、見送りにきた千代は、後からささやいた。
「あたし、子供なんか三人はおろか、当分、一人だって嫌ですからね」
「え？」
一平はあわてて振り向いたが、千代はつんとすましたままであった。二たす一は三か。当分、千代には二という数字は絶対的なものらしい。

2

「東亜商事の総務課でございます」
電話に出た一平の顔が、にわかにゆるむ。が、隣の机からこちらを見ている同僚の視線にきずくと、

あわてて態勢をたて直した。
「もしもしあなた？　私、千代。もううんざりしちゃった。お姑さんとチビッコギャングったら、お昼ごはんまで食べて行ったのよ」
「ほう、それはまた、大変なご災難でございましたねえ」
「ええ、でも、今、ご機嫌よくお引取り願ったわ。これでやっと二人っきりになれるのよ。それで、今夜は二人っきりのパーティをしたいんだけど、すきやきがいい？　それとも、ビフテキ？」
「そうですなァ。その件につきましては、おたくさまのご判断におまかせ致します」
「そうねえ、あなたの実家にいたときは、お肉なんて、いつも二切か三切しか口へ入らなかったんですもの、スキヤキにしましょうか」
「はあ、結構なご趣旨だと存じますが」
「じゃ、きまった。それからね、フフ……今夜は新婚旅行のとき着た、あのネグリジェを着るわ。フフ……早くお帰りになってね」
「はっ、承知致しました。さっそく、そのように手配させて頂きます」
受話器を戻しながら、むずむずと笑いがこみ上げてくるのも無理はない。今夜帰ったら、千代のご機嫌を取り結ばなきゃと覚悟していたのに、千代の方から折れてきたのである。よし、今夜こそ……と一平がなおもにやにやしていると、「小森さん、社長がお呼びです」と、社長秘書が来て、声をかけた。
「社長が？」
一平はどきんとなって、たちまち青くなった。
東亜商事は、株式を公開していないほどの三流会社である。しかし、それでも一平のような平社員に、社長から直々お声がかかるなどということは、ほとんどあり得ないことなのだ。
何だろう。なにか大きなミスでもあったのかな。一平は、最近自分がやった仕事を思い出しながら、社長室へといそいだ。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo

社長秘書室には女秘書の姿が見えず、取りついでもらうわけにはいかない。一平は勇気を出して社長室のドアをノックした。コンコンと内側からもノックしてきた。何だかおかしな具合である。だが、一平にはそんなことに気ずく余裕はない。おそるおそるドアを開けた。

そのとたん、バリバリバリバリッ……と凄まじい音が耳許で鳴りひびき、赤い閃光がチカチカと目を射た。

「ヒエーッ……」

奇声を上げて一平は飛び退った。

「手をあげろッ……」

きんきんと甲高い声がとんで来たと思うと、ドアの陰から、四歳ばかりのころころふとった男の子がとび出して来た。精巧なおもちゃの機関銃を構えているのである。

「なあんだ、坊やか！　ひどいなあ、おどろくじゃないか」

「お前、シェーッっていったよ。大人のくせにだらしがないなあ」

まったく小僧らしい口のきき方だ。一平ならずとも怒りたくなる。だが、待てよ、社長室の前である。滅多なことでボロを出すわけにはいかない。一平は子供の頭を撫でて、社長室の中を覗きこんだ。

「だあれもいないよーだ」

と、坊やの言う通り、誰もいない。

「坊や、いつから居たの？」

「さっきから」

「ふーん。で、さっきから坊や一人かい？」

「そうさ。みーんな、どこかへ行っちゃったよ」

いくらきいても、子供のことだ、要領を得ない。社長秘書の机から、自分の課へ電話しようとして、自分あてのメモを発見した。

〈社長室へ入ってしばらくお待ち下さい〉

待つより仕方がなかろう。一平が入ると、子供もついてきた。

「君、どこの子？」
「お前なんかに教えないよーだ」
「じゃ、教えてくれなくてもいいよ」
子供の相手をするために、社長室へ来たわけではない。一平は社長の机の前の椅子に、ともかくも腰を下した。
「太田茂治ってんだ」
子供というものは、大人がしらん振りをしていると、かまってもらおうと寄ってくるものらしい。
「太田……太田、ああ、守衛さんとこの子供だね」
道理で汚れた服装をしている、と一平はおもった。精巧なおもちゃを持っているのは不思議である。
「こんなところにいると叱られるよ」
「平気だい。おじいちゃんがいいって言ったんだもん」
茂治は社長の机を指して言った。
社長公認のことならば、別に一平に異存のあるはずはない。だが、子供の相手をしてあそんでいるわけにはいかないだろう。
「小父ちゃんは、今、お仕事中だから、君の相手はしていられないんだよ」
一平はそう言って、あとは知らんふりをしているつもりだった。しかし、そんなことでおとなしくしている子供ではない。
例の機関銃を前から射つやら、背中に押しあてるやら、まことにうるさい。知らないふりをしていると、ますます図にのってくる。膝に乗ったり、背中に這い上ったり、はては、勝手に肩車をして、前後左右に揺り立てる始末である。
馬にのって、インディアン征伐にでも向っている積りなのだろう。一平はこういうことには慣れている。昨日まで甥の平太郎がやっていたことである。
一平はされるままになりながら、平然と社長を待っていた。そのうち、さすがにあそびつかれたのか、一平の膝を枕にしてねむりこんでしまった。一

平はしょうことなしに、子供を抱きかかえながら受話器を取った。守衛の太田を呼び出すつもりだった。

その時、社長を先頭に、総務部長が入ってきた。一平はあわてた。社長は一平の手から受話器を取り上げ、元に返すと、

「君が小森君かね」

と、鋭い目でみた。

「はいっ。総務課勤続五年、小森一平でございます」

返事だけは威勢がよかったが、子供を抱えたままである。何とも格好がつかない。

「申し訳ありません。この子が勝手に私の膝に登ってまいりまして、勝手に眠ってしまったのであります。なんですか、この子がここにいてもよいと、社長が申されたそうでありまして……」

しどろもどろの一平に、社長は笑いながら言った。

「ああ、言いましたよ。その子は、わしのたった一人の孫だからね」

「え？」

一平は驚いた。総務部長もうなずいている。こうなれば粗末に扱うわけにはいかない。

「君、重いだろう、掛けたまえ」

やっと社長が声をかけてくれた。一平は待っていたように腰を下してほっとした。重さは大したことはないのだが、眠っている子供というものは、ぐにゃぐにゃとしてつかまえどころがなく、落っことしゃしないか、と心配になってきていたのだ。

「田口君、どうやら君の人選は、あやまってはおらんようだね」

社長は総務部長の方を満足げに見た。

「恐縮です。私の方と致しましても、厳選に厳選を重ねました結果……総務課長も小森君ならと大鼓判を押しまして……」

恐縮しているのは部長だが、一平には何のことか

わからない。
「小森君、この度、社長が急に外遊されることになったんだ」
と部長が突然言った。
「はあ、それはどうも……」
一平はそう言うよりほかはない。
「ところで、君もしっての通り、日下社長の令嬢ご夫妻も外地勤務で、ニューヨークにおられる。そのひと粒種が茂治君なのだが、ご両親が外国滞在中の間、社長がひきとっておられた」
「いや、孫というやつは可愛いいもんでなあ。どうしても手許においておきたくてな。ちょうど、若いもんは新婚旅行気分で出かけたいっていうし……渡りに舟でわしがね」
社長も会社では見せたことのないような顔をして、孫のことを話す。
「ところが、この度のご外遊だ。……まさか茂治君を一緒に連れて行くわけにもいかないし……そこで、社長は適当な家庭に預けていきたいとおっしゃるのだ」
「いや、うちには、乳母も女中も書生もおるのだがね、ひとり者というのは、どうも信用できんのだよ。そこで、家庭円満な夫婦の社員に面倒みて貰えたら、と思ってね、候補者は何人かいるのだが……」
社長と部長のこもごもの説明で、一平にもやっと自分が呼ばれたわけがわかった。
「ま、ま、まさか、私が……」
「きいているぞ、仲がいいんだってな、奥さんと」
部長に肩をポンと叩かれて、一平は思わずよろめいた。だが、体の態勢が立て直ったとき、気持も決まった。
「はい、是非、私どもに預からせて頂けませんか、社長」
「そりゃ、君の茂治に対する態度は、さっき拝見したから、安心というものだが……」
人はどこで見られているかしれやしない。一平は

冷汗をかいた。
「しかし、こういうことは奥さんの気持もたしかめたうえでないと……いま、ここへ呼んだらどうかね」
と社長は言ったが、一平は断呼としていった。
「いやあ、絶対に大丈夫です」
「ほう……近頃、珍しいねえ。いや、たのもしいよ。わしなんかでも、死んだ家内には頭が上らなかったものだが……ああ、男子たるものそれでなくちゃならん」
「はあ」
鷹揚に構えて、全くいい気持であった。
「実は奥さんについても、内々に調べさせたんだがね、なかなか評判はいいね。亭主の両親や兄弟たちの中へはいってうまくやってく……これはむつかしいことだからね」
社長の言葉を、千代が聞いたらどんなによろこぶことか。社長の言葉はまだ続く。
「買物なんかも、慎重で無駄がないそうだし。君、いい女房をひきあてたな」
「いいえ、女房が私をひきあてたんでして」
一平はますますいい気持である。
「ハハハ……それくらいの自信がないと、男はすぐに尻にしかれるからね。結構、結構、では二、三日したら連れて行くから、くれぐれもたのみますよ」
今度は社長が一平の肩を叩いた。身に余る光栄である。
「はっ、承知致しました。どうぞご安心ください」
と一平はこたえて、千代の許へとんで帰りたくなった。社長のお目がねにかなった円満な夫婦だ。千代も大よろこびするにちがいない。

3

ところがそうはいかなかった。千代は一平の言葉をきくなり、肉をはさんだ箸を宙にとめて、ものす

ごい勢いでまくしたてた。

「ええっ、冗談じゃないわ。総務課なんてきこえはいいけど、年中お葬式だの、パーティだのの世話役をする係だってことぐらい、私だってしっています。でも、社長の孫の面倒まで、どうしてみなければならないんですか？　なぜ断らなかったの？」

一平はあっけにとられて見ていた。すきやきだけが平和そうに、暖かい湯気をたてている。女には会社での亭主の苦労など、わかっちゃいないんだ。

「第一、どうしてあなたが頼まれたのよ。あなたの課の佐藤さんや川村さんのお宅なんて、親から建ててもらったお家はあるし、子供だっていないのに、どうして頼まないのよ。ばかにしているわ」

「つまりその、社長はぼくの人柄を買ってくれたんだ。それにお前のことも見込んで―」

一平はこと細かに話した。社長室での誰も見ていないと思った試験にも合格したのである。得意にさえなってくる。これで出世の糸口がつかめるかもしれないのだ。

「どうして預からせてくださいなんて、とんでもないことを言ったんです？」

夫の一大事に内助の功をつくした山内一豊夫人は、どうも昔のことらしい。千代はただただ夫を軽蔑したような目で見るだけである。

「サラリーマンってのはね」

一平もついしゃくにさわって来た。

「あんなにも合理的なアメリカでさえ、五時になりました、さあ帰りましょう、とばかりにさっさと帰っていく奴は出世しないって言われているんだ。まして、日本では義理人情ってものが大切なんだよ」

「出世のために子守りまでしたいんですか」

「ち、ちがうよ」

たしかに社長に認めてもらいたいという気持はある。しかしそればかりではないような気もするのだが、一平はうまく言葉が見つからない。

「私はね、自分の子供だって、いまはいやだって言

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo